

多元システム理論による近世初期白話小説受容の検討

¹佐藤 美希

(札幌大学)

Abstract

The reception of Chinese vernacular novels (hakuwa shōsetsu) via translation and adaptation in early modern Japan exerted a great influence upon the literature of the time, which would later yield some proto-typical translations of Western literary works in the early Meiji era. While the subject has been explored mainly in the disciplines of Japanese and Chinese literature, it has not been studied in translation studies. Polysystem theory (Even-Zohar, 1978) regards translated literature as part of a broad and dynamic system and thus helps elaborate how it occupies a major or minor position in a literary system at a given time. Based on Tokuda's (1987) acclaimed literary study of the renderings of Chinese vernacular novels, this paper attempts to perform a polysystemic analysis of the translation / adaptation of those novels in the late 17th and the early 18th century in order to add a context-oriented perspective to his text-based research.

1. はじめに

本研究では、江戸時代前半における中国白話小説の翻訳・翻案での受容について、翻訳学(translation studies)¹、特に多元システム理論(Even-Zohar, 1978)を援用して検討する。白話小説とは、中国の書物が伝統的に文言(文語体)で書かれていたのに対して、宋朝以降、明・清朝時代を中心に口語の中国語によって書かれた小説のことである。白話と文言とは文法が異なるため、白話小説は日本人が読み慣れていた漢文訓読で容易に読めるものではなかったが(石崎 1940/1967: 8、川島 2010: 311-312)、江戸時代に長崎通事の岡島冠山が『水滸伝』などの白話小説を紹介したのを契機に、知識人たちをはじめ広く読まれることとなった。江戸時代の白話小説受容については、近世文学研究において多くの研究の蓄積が

SATO Miki, "A polysystemic analysis of the translation/adaptation of Chinese vernacular novels in Early Modern Japan." *Invitation to Interpreting and Translation Studies*, No.23, 2021. pages 47-69.
©by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

あるが、本稿はその中でも、原文の白話小説テキストと日本語の翻訳・翻案テキストを精緻に比較考察した徳田武『日本近世小説と中国小説』(1987)²の一部を主に参照する。本論は翻訳学の立場から、この徳田による精緻なテキスト分析による白話小説受容研究に、多元システム理論を用いて翻訳・翻案とそのコンテクストとの相関についての考察を付与することを目的とする。

日本における翻訳学は、西洋語からの翻訳が爆発的に行われた明治時代以降の近現代の事例をテーマにすることが圧倒的に多い。筆者もこれまで英文学を中心に欧米文学の翻訳受容を研究してきたが、明治初期には江戸時代から活躍した戯作者による英文学作品の翻訳があるため、その背景となる戯作文学³が中国白話小説の翻訳・翻案をもとに展開していった様相を理解しなければ、明治初期に戯作者が率先して英文学をはじめとする西洋文学を翻訳・翻案した背景や意識を把握できないと考えている。近世と近代の文学については、文学研究上は古典文学と近代文学という別分野に区分されるのが一般的である。その一方で、例えば柳田(1950/2009, 1951/2009)や前田(1973/2001)などのように、両時代の端境期の文学状況を明確に区分するのではなく徐々に変化していく文学の流れとして連続的に分析する研究や、Ueda(2007)のように江戸後期と明治前半を連続して考察することで、系統的だと見なされている戯作から近代小説への文学的発展という流れが、実際には複雑で意図的に構築された政治的思考を反映していることを明らかにした研究もある。いずれも、一般的な近世と近代の区分を横断しており、そうしたアプローチによって、両時代にまたがる文学翻訳の推移の本質をたどることができると考えられる。筆者は現在、近世と近代初期における翻訳・翻案の連続性(または非連続性)を研究課題としており、300年弱に及ぶ期間が考察対象になるが、本稿はその研究の一部として、白話小説受容初期の約50年間に絞った考察となる。

文学の翻訳は、翻訳学だけではなく文学研究の考察対象にもなるものだが、文学研究では対象の言語や時期、ジャンルなどによって研究領域が細分化されるため、文学の翻訳を包括的に把握するのは容易ではない。この点について、翻訳学に依拠して江戸時代の翻訳文化史を研究したクレメンツ(Rebekah Clements)が、これまでの各分野における研究の成果と意義を十分認めた上で、次のように述べている。

・・・有益な研究が多く存在するのに研究の分野という枠から出られずにいたが、今や機は熟し、研究者たちがその研究を接合し始めれば、より全体的な検討を目指すことが可能だ。また、翻訳の根本である言語面に焦点を当てる研究から先に進み、そうした研究から得られた見識を用いて、日本の歴史の中で翻訳と翻訳者が果たしてきた広範な役割を考察することも求められている。その役割はこれまで認識されていたにもかかわらず、包括的に精査されることはなかった。(Clements, 2015: 5)⁴

言語や時代によって区分される研究分野の枠組を越境することは容易ではない。そのため、複数の起点言語からの翻訳の関係性や時代区分を越える翻訳史的な分析など、全体像の把握が難しい。本研究も、筆者が専門とする英文学・英日比較文学とは関連せず、また中国語を解さないのに中国白話文学の翻訳を考察すること自体、研究の妥当性が疑問視されるのかもしれない。しかし、研究分野の枠組や言語的な制限があっても、上記のクレメンツが言及するように、先行研究の見識を積極的に利用することで、分野や言語という境界によって分断せずに、関連があると考えられる翻訳事象について包括的な理解を試みることができるのではないか。例えばヴェヌティ(Lawrence Venuti, 1998)は日本語を解さないが、吉本ばなな『キッチン』の英語訳(1993)の事例について、複数の批評家の発言や先行研究をもとに、同英語訳を戦後の日本文学翻訳のコンテキストに置きながら考察している(pp. 67-87)。この考察は日本語原文を一切扱わずとも、関連する先行研究やコンテキストの分析によって、彼が身を置く目標文化の翻訳事例の考察として十分説得力を持つものだ。

こうした点を鑑み、本稿では次のような方法で考察を行う。

- 1) 白話小説とその翻訳・翻案について、原文と翻訳・翻案との異同の内容や言語的側面の分析は十分に信頼できる先行研究に依拠する。
- 2) 原典テキストの精読を中心とする文学研究的アプローチではなく、翻訳とそのコンテキストに焦点を当てる多元システム論を援用する。
- 3) 同理論の仮説が江戸時代の白話小説受容初期にも適用可能かどうかの検証も含めて、当時の文学システムとそこでの翻訳の位置づけを考察する。

この方法によって、白話小説受容初期の翻訳がそれを取り巻く当時の文学の状況とどのように関連し、どのような機能を持っていたかを明らかにする。

クレメンツはさらに、文学の翻訳とそれ以外の翻訳が完全に区別されて研究されてきたことも問題視している(Clements, op. cit.)。彼女の著書は実際にそうした区別をせずに江戸時代の翻訳の全体像を描くという偉業を達成している。しかし、文学という一領域だけに絞っても、その中で細分化された枠組を横断するのは容易ではない。本稿は近世文学の数十年を対象を絞って、その横断を試みる。本稿はまた、翻訳学と文学研究を接合する一例にもなる。文学研究は基本的に原典の精読を旨とするためか、翻訳そのものが主たる考察対象とされることは少なく、翻訳学の研究手法や考え方は既存の文学研究ではほぼ参照されていない。近年の比較文学分野では、「世界文学とは翻訳を通して豊かになる作品である」(Damrosch, 2003: 281)⁵という定義を掲げる〈世界文学〉の理論が注目を集めていることもあって翻訳への

言及が増加しているとはいえ、研究論文や学会発表での翻訳学への言及は依然として一部にとどまる⁶。本研究で、原典テキストをめぐる分析を中心とする文学研究と、その翻訳・翻案での受容をコンテキストにも焦点を当てて分析する翻訳学とが、文学を研究する両輪になり得ることを示したい。

2. 徳田武による白話小説受容の先行研究

徳田武による『日本近世小説と中国小説』(1987)は、約 900 ページにわたって江戸期の白話小説受容を極めて詳細に論じた研究書である。この中で白話小説受容は次の 4 期に区分される(pp. 2-5)。

- ・第 1 期(元禄・宝永・正徳・享保期=1688-1736 年): 文言体と白話体が混在する講史(演義)小説⁷の日本語翻訳／翻案である通俗軍談⁸が多く出版された時期
- ・第 2 期(寛延～享和期=1736-1803 年): 白話小説の翻案が読本として成立する時期
- ・第 3 期(享和～幕末=1803-1867 年): 長編読本、戯作の流行期
- ・第 4 期(明治=1868-1912 年): 近代小説に依然として読本の影響が及んでいた時期

本論は前章で述べたように、白話小説の翻訳・翻案での受容が明治の西洋文学翻訳につながる流れをたどる研究の一部であり、上記の各期それぞれが論文の主題になり得る。本稿では、まず白話小説受容初期である第 1 期のみを対象を特化して考察する。

まず徳田の分析を整理しておく。徳田は、通俗軍談は中国講史(演義)小説の翻訳あるいは翻案⁹であるという前提のもと、この時期に出版された通俗軍談の 10 作品について底本を特定し、通俗軍談の文体や底本との相違を精緻に分析している(pp. 15-58)。初期の元禄 2～5(1689-1692)年刊行の『通俗三国志』の原作『三国志演義』は白話が少ないものの、元禄 8(1695)年『通俗漢楚軍談』の原作『西漢通俗演義』は白話小説と言って差し支えないという。それまで白話小説最初の翻訳とされていたのは長崎通事の岡島冠山による『忠義水滸伝』の訓点本(享保 13=1728 年)と考えられていたが、徳田はこの『通俗漢楚軍談』が白話小説翻訳の嚆矢であると見なしており、旧来の文学史上の項目を 30 年以上も修正している(p. 19)。

講史(演義)小説の翻訳あるいは翻案であると定義されている通俗軍談の翻訳態度も底本と対照されながら考察されている。そこでは、10 作品のうち初期に出版された 4 編(『通俗三国志』(元禄 2～5=1689-1692 年)、『通俗漢楚軍談』(元禄 8=1695 年)、『通俗唐太宗軍艦』(元禄 9=1696 年)、『通俗列国志』(元禄 16～宝永 2=1703-1705 年))は「原本のおおむね忠実な翻訳だ[中略]原文に手を加えて新たな話を付け加えたり、文飾を大きく加えて

原文をさらに面白く読ませようとしたりする態度は、ほとんど見られない」(p. 23)と説明する。しかし、元禄 12(1699)年に出版された『通俗両漢紀事』については、原作および参考にされたと考えられる中国講史小説を同定した上で、「話を面白くしようという明確な意図に基いて、計算された方法を持って構成された翻案作品だった」(p. 41)と述べる。そしてこの翻案の意義を、『通俗両漢紀事』が日本人の手になる講史小説の嚆矢と考えられ、その後に登場する長編読本の「前駆的な作品」になったことだと考察している(pp. 41-42)。また、宝永 2(1705)年以降の 5 編(『通俗南北朝軍談』『通俗北魏南梁軍談』(宝永 2=1705 年)、『通俗列国志十二朝軍談』(正徳 2=1712 年)、『通俗宋史軍談』(享保 4=1719 年)、『通俗両国志』(享保 6=1721 年))についても翻訳というより翻案であると分析され、それぞれの翻案意識について対訳で事例を挙げながら、原文の構成を適宜変えたり華やかな場面の情景描写に大きく文飾を加えたりする具体的な方法に着目するだけではなく、歴史的記述の正確さにこだわってしまうと翻案の効果が薄れるという特徴も指摘する(pp. 48-49)。

このような徳田による起点テキスト(source text—以下 ST と略記)と目標テキスト(target text—以下 TT)の詳細な分析からは、第 1 期の白話小説受容について(通俗軍談の翻訳(通俗書前期)→通俗軍談の翻案(通俗書後期)→読本の創作(白話小説受容第 2 期)という、白話小説から読本に続く一連の流れが見えてくる。徳田の結論は次の通りである。

・・・作品によって翻案の部分の多寡や翻案の程度の大小が存するが、元禄初年の忠実な翻案[本稿筆者注:「翻訳」の誤りだろう]紹介から始まって、『[通俗]両漢紀事』の如き講史小説が出現し、さらにまた宝永・正徳にかけて翻案がまじりこみ、享保に及ぶと部分的には読本とも見なされるまでの翻案が施される過程だった。それは一口に言えば、翻訳から翻案が生ずる道程、だった。ということは、中国講史小説の翻訳から読本的なものが発生してゆく道程でもあった。(p. 53)

この道程は、通俗軍談の翻案が享保 8(1723)年の『通俗台湾軍談』や宝暦 13(1763)年『通俗医王者婆伝』のような読本の前身とも言える作品に繋がるとされる。特に後者は白話文学の影響を受けて読本の成立を担った都賀庭鐘の手になるもので、通俗書と読本がかなり近づく様相を物語る作品とされる。こうして、都賀や上田秋成が活躍する白話文学受容の第 2 期へと進んでいくのである(pp. 53-55)。

徳田は『日本近世小説と中国小説』で論じた通俗軍談のうち『通俗両漢紀事』以外の 9 編について、各底本との対訳を『対訳中国歴史小説選集』第 I 期全 8 巻(1983-1984)として出版しており、そこでも ST と TT を比較しながら翻訳態度をより詳細に解説している。それによると、原文に忠実とされる前期の 4 編では、章題、本文中の書簡や経書・史書・子書・文集など

を出典とする格言的な言葉などは、日本語訳ではなく原文に訓点を施して記載されている。また漢詩の部分に関しては、すべて省略されるか訳出されずに原文に訓点を施した形で示される(徳田 1983a: 337-338, 1983b: 331, 1984a: 211-212, 1984b: 186-188)。一方、『通俗両漢紀事』以降の翻案と見なされる後期の作品が前期 4 編の翻訳と大きく異なるのは漢詩の扱いであるように見える。すなわち、前期の翻訳において漢詩は省略されるか原文に訓点を付けてそのまま示されているのに対し、後期の翻案では漢詩を詩のままの提示するのではなく、内容を本文中に「とかしこんで訳すことが多い」とされる(徳田 1983c: 379)。また、出版年が後になるほど、原文を改作する度合いが強くなっていることも窺える。

以上のように、通俗軍談の底本を指し、ST と TT 間の詳細な対照分析に裏打ちされた徳田の研究は十分に信頼に足る先行研究であることは言うまでもない。では、この先行研究について翻訳学の理論や概念を用いて再検討を加えると、どのような考察を付与できるだろうか。徳田は近世読本の成立との関連の中に通俗軍談という TT を位置づけているが、以下では、より広範なコンテキストも視野に入れる翻訳学による分析を加えていく。

3. 翻訳学からの検討——多元システム(Polysystem)理論における翻訳の位置づけ

イタマー・イーヴン=ゾウハー(Itamar Even-Zohar)が 1970 年代に提起した多元システム(Polysystem)理論は、ロシア・フォルマリズムの応用から出発しながら、文学にとどまらない広い文化全般を「多元的なシステム、つまり、様々なシステムが集まり、互いに交差したり一部重なり合ったりすると同時に異なる選択も行いながら、それでも一つのまとまった構造として機能するシステム」(Even-Zohar, 1990: 11)と見なす。彼は文化や文学という大きな多元システムに含まれる翻訳文学も一つの多元システムと捉え、多層に重なり合うシステム内の様々な要素と結びつけて考察しようとする。多元システム理論に基づけば、文学に限らず、翻訳全般が含まれるより大きなシステム(例えば出版システムや学問研究システムなどが考えられるだろう)との関係も、翻訳システムが含む様々な種類・ジャンル(例えば文学、ノンフィクション、学術書、あるいは文学の中でも各国文学、児童文学、絵本など)間の関係性も考察対象になる。これによって、翻訳テキストは ST から TT へのテキスト変換の問題に留まるのではなく、目標文化の他の文化的要素や、社会や経済といった様々なシステムとの関係でどのように機能するかが重視されることになり、翻訳学の地平は大きく拡大された。

この理論を日本の翻訳状況に応用した研究には、例えば水野(2007)や齊藤(2012)があり、両者ともに明治期の翻訳について多元システム理論に依拠して分析している。彼らの研究は近代日本の文化や日本語が形成される過程の様々な要素と翻訳を結びつけて分析し、当時の翻訳像の一端を明らかにしている。齊藤は、明治の文学と言語に関わるコンテキストを詳

細に確認しながら森田思軒の訳業を多層なシステムに位置づけており、多元システム理論の有効性を示す具体例となっている。また邵(2016)も同理論にもとづいて日本におけるアメリカ文学の位置づけを広く日本の時代思潮との関連で論じている。こうした先行研究は、この理論が日本の翻訳状況にも応用可能であり、分析装置として十分説得力を持つことを示している。ただ、同理論から近現代の状況は論じられているが、近世の翻訳状況については筆者の管見の限りまだ考察は行われていない。

多元システム理論では、翻訳文学は目標文化の文学システム内で周縁的な地位に置かれることが多いものの、ある特定の場合に中心的な位置を占める傾向がある、という仮説が示されている。「翻訳文学が中心的な位置を占める」というのは、翻訳文学が自国の文学を推進するのに不可欠で革新的な力となって文学史上でも重要だと見なされるようなケースを意味する(Even-Zohar, 1978/2000: 193)。翻訳文学が中心的な位置を占めるのは次の3種類の場合だとされる(ibid.: 193-194)。次節での考察に関連するため、ここで示しておきたい。

第一は、自国文学が「若い(young)」場合である。自国文学が未成熟であれば、翻訳文学を通して他の文学から多様なタイプの文学形式を取り入れるため、翻訳文学が中心的な地位になり得る。第二は文学が「弱い(weak)」場合で、これは、多元システム理論を解説するチャン(Nam Fung Chang, 2010: 260)によると、「周縁的(peripheral)」と同義ではなく、その文学が自分のレパートリーのものしか受け入れないために新たな状況に対応できないような状態を指す。つまり、外国文学も含まれる文学多元システムの中で、自国文学が新たな文学のレパートリーに対応できないような場合に、翻訳文学が自国文学の代わりにその役割を果たす可能性があるという意味である。第三は自国文学が転換点、危機、真空(空白)状態にある場合で、齊藤(op. cit.: 26)によれば、例えば自国文学の「既成のモデルが若い世代には受け継がれないという歴史的瞬間、転機」の際に「以前からの文学が許容されなくなると、文学的「真空」が発生し、その位置、つまり中心的位置を翻訳文学が占める」傾向を示す。

イーヴン=ゾウハーはさらに、目標文化における翻訳文学の地位は、翻訳の規範・行為・方針と関連があると述べる(Even-Zohar, 1978/2000: 196)。彼によれば、目標文化において翻訳文学が中心的な地位を占める場合、翻訳者は自国文学に既にある出来合いのモデルに則ってSTを翻訳しようとするのではなく、そうした自国のモデルを破ろうとするという。その場合、翻訳はSTに近づく傾向がより強まるため、自国文学の観点からすると異質で革新的に見える。その異質性・革新性が文学多元システムの中で認められなければ、そのやり方の翻訳文学は支持されず、もし認められればその翻訳の在り様が広まっていく。一方、翻訳文学が目標文化の文学多元システム内で周縁にある場合、翻訳者は自国文学に既にある出来合いのモデルの中で最善のものを使って翻訳しようとするため、その結果、いわゆる「原文への忠実さ」から離れる傾向が強まる(pp. 196-197)。

このように、翻訳システム内外の要素を加味して検討することで翻訳のあり方を説明しようとするのが多元システム理論であるが、多層に重なるシステムの中に内包される要素をどこまで網羅すべきなのだろうか。たとえある一時期に対象を絞ったとしても、その時期の文学にまつわる要素だけでも多様であり、システムを「厳密な意味で完全に描写することは不可能、あるいは不可能に限りなく近い」(北代・齊藤 2013: 151)ため、一つの研究では限定された要素に考察を限定せざるを得ない。したがって、多元システム研究では、一つの研究で普遍的な説明を求めるのではなく、システムの一部の要素に限定した研究を複数積み重ねていくことが必要になるだろう。一つの研究は、文学システムや翻訳システムの全体像を理解する過程の一端と見なすべきであり、過剰な一般化は常に避けなければならない。

さらに、この理論が日本の翻訳状況にそのまま適用可能なのかも検証する必要がある。例えば、上述の齊藤 (op. cit.: 27) は、この多元システム理論は「絶対の法則ではなく、傾向であるという理解をしたほうがよい」と注意を喚起し、実際に彼女自身が明治中期の森田思軒を例にイーヴン=ゾウハーの仮説に反する考察も示している。次節では、近世の白話小説受容状況が多元システム理論の仮説で説明可能かどうかも含め、考察を進める。

4. 白話文学受容第1期頃の文学多元システム

ここでは、2章で概観した徳田の分類による白話小説受容第1期(元禄～享保期=1688-1736年)における日本の同時代文学と外国文学という二つのシステムを比較考察し、多元システム理論の観点から、この時期の翻訳文学としての通俗軍談について考察する。

4.1 江戸初期から元禄～享保期(1688-1736)の自国文学システム

白話小説受容第1期の始まりとなる元禄年間(1688-1704年)前後には元禄文学が栄えており、それ以前の江戸時代初期には、すでに仮名草子(仮名あるいは仮名交じりの文体で書かれた散文の短編小説)が普及していた。江戸期の出版文化を研究した彌吉(1989: 321)は「この頃は教訓を締めくくりにした随筆風の小話が多く、稗史¹⁰に組み立てられる前の姿であった」と仮名草子の特徴を述べ、江戸時代以前に出版されていたイソップ寓話の日本語訳である『伊曾保物語』をその影響元の一つと見ている。こうした仮名草子の教訓や啓蒙といった目的ではなく娯楽性の追求へ向かった散文文学が、元禄文学の典型的ジャンルとなる浮世草子である。これは天和2(1682)年の井原西鶴『好色一代男』を嚆矢として天和～元禄初期(1680年代)に成立し、当時の風俗や人情を描く西鶴らによる長編の作品が人気を得ていく(岡本・雲英 2006: 30)。

元禄文学について、加藤(1975/1999)は16世紀後半から17世紀前半に「支配層と大衆の文化の分裂」が始まり、17世紀後半(元禄文化)の大衆文化の確立につながると見なしている。17世紀前半の仮名草子から後半の浮世草子に続く流れも、前者は支配層である武士

階級の知識人たちが自分たちの価値観に基づきながら大衆である町民に向けて執筆していたのに対し、後者は作者自ら大衆の価値観に立って読者である町人に訴えかけ、徹底的に世俗的な内容を書いたと加藤は説明する(p. 464)。彼はさらに、こうした大衆文学確立の背景の一つとして印刷の普及を挙げている(p. 449)。ヨーロッパ文学が15世紀半ばのグーテンベルグによる活版印刷発明によって大きく発展したように、1世紀半ほど遅れて日本の近世文学が拡大していく背景に印刷の普及があり、これが文学作品の流通と生産・消費を牽引する作用を果たしていた。日本では安土桃山時代の1590年に天正遣欧使節団がヨーロッパからグーテンベルグ式活版印刷機を持ち帰り、イエズス会によってキリシタン文献が印刷出版されていたし(彌吉 op. cit.: 83-85)、文禄の役(1592-93)の後に朝鮮から持ち帰ったとされる活版印刷機で後陽成天皇の勅命による印刷も行われた(ibid.: 85-87)。その後の数十年間は活版印刷が中心だったが寛永年間(1624-1643年)を境に製版(木版)印刷が主流になり(ibid.: 94)、その版木を所有・管理する書籍問屋が生まれ、印刷出版が定着した。

出版状況に焦点を当てて江戸時代の文学を見る彌吉(ibid.)や内田(2007)は、印刷の普及に伴って、江戸初期には上方で、その後は江戸でも、出版が商売として成立していたことを指摘する。つまり、一定程度の数の読者を想定した上で、利益を見込んで書物が出版されていたということである。17世紀には武士階級だけではなく、町人階級も女性や子供も含めて識字率が大きく上昇しており、大衆の読者がかなり増加していたといわれる(Clements, op. cit.: 49)。こうした読者層の拡大もあり、仮名草子の『清水物語』(寛永15=1638年)は、当時は数十部の出版部数で商売が成立したといわれる中で2~3千部を売り上げており(彌吉 op. cit.: 327、内田 op. cit.: 12,40)、書物の出版が江戸初期には既に大きな商売になり得ていたことがわかる。

慶長年間(1596-1615年)には中世に書かれた『伊勢物語』や『源氏物語』『徒然草』なども流通しており(彌吉 ibid.: 320)、絵入り版など複数の版があったというから(内田 ibid.: 43)、大衆の読者にも広く受け入れられていたことは容易に想像できる。ヨーロッパのルネサンス期にはギリシャ・ローマの古典が印刷されたが、過去の作品が印刷術の普及によって世に出されるという点で類似する現象である。『伊勢物語』は仮名草子の『仁勢物語』(寛永16-17=1640年頃)¹¹という当時の大衆文化にストーリーを置き換えるパロディを生んだが(加藤 op. cit.: 451-454)、加藤も指摘するように、パロディ作品が成立するためには、パロディの元となる先行テキストが作者と読者の共通知識でなければならない。『伊勢物語』を知識人の教養であったと考える加藤は『仁勢物語』が「決して広範な大衆の読み物ではなかったろう」(p.453)¹²と述べている。しかし、『伊勢物語』は慶長13~15(1608-1610)年に10種類も印刷出版されている(彌吉 ibid.: 92)。これは嗟峨本(古活字本)と呼ばれる体裁で、挿絵や装飾をふんだんに用いたおそらく高価な書物だったであろう。しかし、同様に嗟峨本として出版されて人気

あったと言われる『徒然草』でも出版されたのは 5 種類、『方丈記』で 3 種類 (ibid.: 93) であったことを鑑みれば、『伊勢物語』は破格に人気があったと考えられる。また、この時期に登場していた仮名草子は仮名で書かれたことから多くの読者を獲得したが、嵯峨本も仮名主体であったこと (内田 op. cit.: 8) を考慮すると、必ずしも知識人だけの読み物ではなかつたろう。当時「広範な大衆」に普及していたとは断言できないまでも、上述したように当時は数十部の出版で商売になったということを勘案すれば、『仁勢物語』というパロディを享受する読者を十分に獲得できると見る商業的な意識が働いていたと推測できる。パロディのように先行するテキストを新たに書き換えるという行為には、常に何らかの意図が存在する。『仁勢物語』の出版には、『伊勢物語』を読者の身近なストーリーに置き換えることで、彼らの関心に訴えて購買意欲を喚起しようとする一面があったのではないか。そう考えると、大衆文化や風俗に根付いた江戸時代の人情を描く浮世草子が元禄時代に人気を博す土壌は、この頃にはもうできつつあったということだろう。

当時人気だったもう一つのジャンルは軍記物だった。中世に書かれた軍記物は、『平家物語』や『太平記』などのように大きな合戦や争乱を題材にしたいわゆる歴史物語の性質が強く、一方で近世に書かれた軍記物の多くは武家の先祖の武勲譚や家伝としての性質が強まり、中世までの軍記物語のように文芸作品として読まれるジャンルにはなっていない¹³。江戸初期はまだ戦国時代の名残もあつただろうから、読者にとって歴史物語の性質を持つ軍記物は興味を惹くものだったのだろう。内田 (op. cit.: 42) は『太平記』が庶民に人気があり、印刷出版されていただけでなく、江戸時代初期には道端で人々に『太平記』を講談のように読み聞かせる「太平記読み」と呼ばれる職まであつたことに言及している。また彌吉 (op. cit.: 326) は『信長記』(元和 8=1622 年) や『太閤記』(寛永 10=1633 年) に触れ、後者は「事実には忠実というよりも儒教精神で善悪を論じている」と指摘している。『信長記』と『太閤記』は中世に書かれた軍記物と同様に歴史物語のような性質が見られ、上述の「太平記読み」の題材にもなつたという。加藤が述べているように元禄以前の社会・文化はまだ武士階級の価値観が根強く浸透しており、それが広く受け入れられていたと考えられる例だろう。

元禄から享保までの約 50 年間 (1688-1736 年) は、小説では浮世草子が、演劇では近松の浄瑠璃と歌舞伎が人気を博した。この 2 人についての彌吉 (ibid.: 331) の評が興味深い。

近松が武士の精神と人情の機微に通じ、後年心中物に心弱くなり、精神の武士道から、男女の対方に殉ずるのを讚美した情の厚さがあるのと、享楽主義でつき離して人生を見る西鶴の醒めた眼とは対照的な好取組だと思ふ

この評価と、加藤による元禄文化の価値観の説明を重ね合わせてみたい。加藤は上述したように「支配層と大衆の文化の分裂」を元禄文化の特徴と見なすが、さらにそれを「価値の二重構造」、つまり「表の義理と禁欲的な倫理、裏の人情と感情的な快樂主義」(加藤 op. cit.: 466)と換言する。その「表」「裏」は理想と現実のように乖離したものではなく、理想の価値観の中に「表」「裏」両方、つまり一方に社会的秩序や行動規範を求める武家社会の「表」の理想があり、その「裏」には個人の内面の刹那的、感情的な欲求があった。支配階層である武士(あるいは幕府と言うべきかもしれない)は秩序維持のために儒教精神に基づく義理と倫理を重んじる。近松は武家出身であるからその「表」の理想を深く理解しつつ情の果ての心中という「裏」の美意識を描き出すが、その「裏」の美意識は、むしろ「表」とつながる義や潔さを内包する。例えば近松の『女殺油地獄』(享保 6=1721 年)は主人公による人殺しのストーリーだが、親の愛や情け、社会の義理も共に描くことで、刹那的な人殺しの高揚感を余計に際立たせるだけではなく、読者に実際の「表」の社会に即した共感をもたらす。一方で町人出身の西鶴は、武家社会の「表」の理想とは異なる「裏」の享樂主義的欲求を描くが、例えば西鶴が好色物¹⁴の中で描く享樂的内容は、当時の風俗や人情を鮮やかに描いているとは言え、大衆が実人生に即して共感できるようなものではないだろう。西鶴は、あくまで読者の享樂的願望や欲求を作品上で満たして多くの読者を獲得しようという商業的な意識で書いていたのではないか。あからさまに享樂的欲求をデフォルメした虚構の物語によって自分の作品が読者の現実逃避的な娯楽になることを理解し、「表」の倫理に縛られる実人生と「裏」をテーマとする物語には距離があることも理解している。そうした姿勢を彌吉は「つき離して人生を見る醒めた眼」と表現しているのではないか。このように、元禄文学は当時の「裏」の理想を殊更描いたように見えるが、「表」の理想を知るからこそその文芸であることを逆説的に示していると言えるだろう。つまり、この時代には「表」「裏」両方の理想が文学のテーマとして求められていたと考えられる。

4.2 元禄～享保期(1688-1736 年)の外国文学システム

日本の外国文学受容は明治になるまでは中国文学が中心だった。西洋文学からは、ラテン語版¹⁵ イソップ寓話の翻訳である『イソポのハブラス』が文禄 2(1593)年に出版されたのが本邦初である。同寓話の日本語訳には、慶長末～元和頃(1610 年代)に刊行されたとされる『伊曾保物語』もある(川戸 2020: 22)。これは挿絵のない古活字版や絵入り本など、数種類の版が確認されているほど、かなり広く人口に膾炙していた。しかしその後の西洋文学の紹介は文政 13(1830)年頃の十返舎一九『新製小人嶋廻』(『ガリヴァー旅行記』*Gulliver's Travels*の翻案と考えられる。川戸 ibid.)や嘉永 3(1850)年『漂荒紀事』および安政 4(1857)年『魯敏遜漂行紀略』(双方とも『ロビンソン・クルーソー』*Robinson Crusoe* のオランダ語からの重訳)が出版された幕末まで待たなければならない。

江戸期の中国文学以外の翻訳文学が上記のものしかないというのは、中国文学が外国文学システムで特権的な地位だったことを意味する。この点について『近世日本に於ける支那俗語文學史』(1940/1967)の著者である石崎は、中国文学の位置づけを次のように説明する。

日本に於ける支那文学或は漢文学が、支那の文学即ち外国文学であると同時に日本文学の一部として最も重要な意義を有していることは、今更言う迄もないことであろうと思う。[中略]英・独・仏其他の欧米文学は、[中略]実は結局翻訳文学に過ぎず、敢えて国民生活の根元に融合したものと即断することは出来ない。

[中略][訓読法によって]漢文は外国語としてでなく日本語として読み得る性質のものにしてしまったのである。[中略][それによって]我が国の学者をして漢文を以て第二の国文たらしめ、[中略]日本人の創作になる漢詩文は時代に生長繁茂して鬱然たる文学史は形成せられたのである。

之れを他の外国文学たる仏教に伴った印度文学或は欧米文学等に就いて見れば [中略]国民生活に即した文芸的作品の何者をも有して居ない。国語に対してはあくまで外国語に過ぎなかった。漢文は之等とは根本的に性質を異にして、嘗ては移植翻訳せられたるも、遂に根を下して此の土に生長發育して独特の生命を賦与せられたのである。(pp. 3-5)¹⁶

中国文学は 1) 当然外国文学である、2) しかし日本人の根本の精神に根付いている外国文学である、3) 訓読という方法によって日本語で読むことができる、4) 翻訳文学ではない、というのである。つまり、中国という外国の文学でありながら、言葉を自分のものに書き換えなければ理解できない他者の文学ではないというのである。中国文学は、自分のものとして理解できる言語で書かれており、外国文学でもあり日本文学でもあるという特殊で特別な位置づけが与えられている。

これはおそらく、漢籍を当然のものとして受容してきた近世までの知識人の認識と一致するだろう。例えば、漢文訓読を翻訳であると見なし、漢籍を訓読ではなく口語の日本語に訳して理解すべしと説いた荻生徂徠『譯文荃蹄』の序文「題言十則」にも、中国語を他者の言葉とは見なさない思考が見える。『譯文荃蹄』は元禄 3(1690)～同 5(1692)年頃にかけて徂徠が行った講義の口述筆記を元に、正徳元(1711)～同 5(1715)年の間に出版された¹⁷(佐藤 2018: 256)。その序文であり徂徠の翻訳観が述べられている「題言十則」は正徳元(1711)年にはすでに草定されていたようである(黒住 2003: 554)。白話小説受容第 1 期と同時期のことである。徂徠は、中国語とオランダ語を比較して、中国語との距離の近さを次のように述べる。

訳の一字、読書の真決たり。蓋し書は皆文字にして、文字は即ち華人の語言なり。其の荷蘭等の諸国、性稟常に異なるが如きは、当に解し難き語、鳥鳴獸叫の如く人情に近からざる者あるべし。而して中華と此の方と、情態全く同じく、人多く古今の人相及ばずと言う。予三代以前の書を読むに、人情世態、符契を合せたるが如し。此の人情世態を以て此の語言を作す、更に何の解し難きことのあらんや。[中略] 祇中華と此の方、語言同じからざるを以て、故に人は奇特の想を作す。能く其の語を訳すること、此の方の平常の語言の如くんば、言うべし能く書を読む者なりと。(『譯文荃蹄』河出書房版全集：25-26.)¹⁸

オランダ語のような西洋の言葉は、その言葉を使う人々と日本人の性質が全く異なるために理解は困難だが、同じ人情世態を共有する中国人の言葉は理解が容易であるのだから、日本の口語で書物を読むべきである、というのが徂徠の主張である。中国語は未知の思想を背景とする他者の言語ではないという認識は、石崎が述べていた中国語が外国の言葉でありながら他の外国語とは違う特別な存在であるという思考と一致する。

徂徠による次の言及もまた、日本の知識人にとって、書記言語においては中国語と自国語の境界が曖昧であったことを示す例である。

此の方の学者、方言を以て書を読み、号して和訓と曰い、諸を訓話の義に取れり。其の実訳なり。しかも人は其の訳たることを知らず。(ibid.: 24)

日本の学者は漢文訓読を用いていかにも中国語を読んでいる気になっているが、それは実際には中国語を読んでいるのではなく、漢文訓読は日本語訳の一つだと徂徠は主張する。しかし当時の知識人たちにとって、訓読で中国語を読むという行為は、あたかもバイリンガルとして読むかのように自動化され、日本語が介入している読み方だとは認識されていなかったことがわかる。

次に、江戸時代初頭から元禄～享保期(1688-1736年)の具体的な中国文学受容の状況に目を向けると、この時期は上方を中心とする書籍問屋(版木を所有し、当時主流であった木版での印刷出版も手がけた大資本の本屋)が漢籍を多く出版していたという(彌吉 op. cit.: 121)。出版された文言体の書籍は、上記のように訓読で当たり前中国語を読んでいた知識人に広く膾炙したと考えられる。

一方、文言小説を訓読ではなく日本語で受容した例は、鎌倉時代初期から確認されているが、江戸時代になると、慶安 4(1651)年に『棠陰比事』の翻訳『棠陰比事物語』、寛文 3(1663)年には『開元天實遺事』と『長恨歌傳』などを翻案した『楊貴妃物語』がある(石崎 op. cit.: 179-181)。寛文 6(1666)年には宋代の文言小説『剪灯新話』の翻案とされる仮名草子『伽婢子』が浅井了意によって書かれている。また、同小説から 2 編が翻訳されているとされる『奇異雑談集』(訳者も編者も不明)が貞享 4(1687)年に出版されている。富士(1972)によれば、この書物の成立はもっと以前だが、『剪灯新話』の翻訳部分は江戸時代になってから付け加えられたものだという。元禄に入ると、了意は『伽婢子』の他にも多くの仮名草子を執筆したが、その題材は日本の古典作品や唐の文言小説だった(彌吉 op. cit.: 325)。

他方、白話小説の受容は、文言小説とは状況が異なる。文言を訓読してきた知識人たちにとって、17 世紀に長崎唐通事を通じて移入されていた白話小説は新参のジャンルだった。文言とは文法が異なる白話は訓読で読むには適さなかったため、知識人たちにとっては馴染みのない文体だった(石崎 op. cit.: 8、川島 op. cit.: 311-312)。しかし、元禄以降、唐話学(中国語の特に口語を学ぶ学問)が知識人たちの間で盛んになり、実際に徂徠が正徳元(1711)年に「訳社」を結成して長崎の唐通事であった岡島冠山を師に迎え、白話小説の『西遊記』や『水滸伝』を教材にして中国の口語を学んでいたこともあり、白話小説は積極的に受容された(石崎 op. cit.: 96、磯部 1988: 100)。川島(op. cit.: 311-312)は、これは唐話の教材と言うだけではなく、それまでの文言小説よりも面白いという理由が大きかっただろうと述べる。だからこそ白話小説がその後日本語に翻案されて読本の成立につながっていくのである。ただし、白話はそれまでの訓読が通用しないため、ここで初めて中国文学が自らの言葉として読めない外国文学として認識されることになったと考えられる。

4.3 多元システム理論による考察

a) 文学の大衆化

まず、江戸時代の文学システムが、印刷の普及によってそれ以前とは様相が大きく異なったことを再度述べておきたい。活版印刷の導入から古活字版(嵯峨本)、木版印刷へと変遷しながら普及した印刷技術によって、書籍の出版が利益を生み出す商売として成立したことは上述した。江戸初期は上方で、その後明暦以降(1655～)には江戸においても出版が始まっていた(彌吉 op. cit.: 123-127)。元禄期には両地域に多数の書肆が存在し、元禄末期の1700年までには、京都に 701 軒、大坂に 185 軒、江戸には 242 軒の書肆があったという(Totman, 1993: 199)。西鶴の浮世草子はまず京都で出版されたが、すぐに江戸の万屋が西鶴本の江戸売り捌き元になる(岡本・雲英 op. cit.: 94)など、書肆間の取引や書籍の流通

体制が確立していたことがわかっている。また、京都の八文字屋のように、正本^{しょうほん}(浄瑠璃や歌舞伎の台本)の出版から浮世草子、役者の評判記などの出版を手がけ、大衆の需要に応じて多くの部数を出版して名を成した書肆もあった(ibid.: 92-93)。

それまでの写本文化では文字で書かれた文学作品の読者は限られてしまうが、それでも文学が読まれ続けてきたのは知識人たちの知識欲と知識伝達欲に支えられてきたおかげと言えるかもしれない。しかし、知識欲・知識伝達欲が縦糸だとすれば、印刷出版によって読者の需要を満たし消費者層を拡大しようとする経済的な動機がそこに横糸として差し込まれて、文学作品の流通が決定されるようになる。例えば「4.2」で言及した文言小説の翻案の増加については、訓読で原典を受容した知識人が、単に面白い作品を紹介しようという知識伝達欲だけで翻案したのではなく、当時の仮名草子や浮世草子の人気にあやかって、日本の読者の関心に即した面白い作品を訓読できない読者にも広く読んでもらって利益を得よう、という二つの動機から何を翻案するかが決められたと考えられる。

このように、仮名草子の人気や、大衆の価値観で大衆の世俗文化を描く浮世草子の成立は、印刷出版の普及によって可能になったと言える。江戸時代の散文文学は大衆文学として出発したのであり、この後の散文文学は大衆の読者の興味関心を考慮しなければ成立しなくなったということだろう。文学システムの中で消費者である読者の嗜好が大きな要素になっており、大衆をターゲットとした文芸が文学システムの主要な位置を占めていたといえることができる。

b) 当時の文学システムにおける通俗軍談

当時の文学システムについて、「4.1」と「4.2」では自国文学と外国文学のシステムを区分して記述したが、「4.2」で述べたように、中国語・中国文学は外国語・外国文学であると同時に自国の言語・文学と同様という位置づけが当時の知識人に共有されていたとすれば、訓読で文言をそのまま受容できていた時期については自国文学と外国文学という区別は意味をなさなくなる。

しかし、同じ中国文学でも、前節で言及したように、白話小説は中国語であっても訓読で読むには適さず、このテキストを受容した知識人はそれを新たに外国語として認識せざるを得なかったはずである。白話小説は文学システムの中に、自国文学と境界が曖昧な、つまり外国文学でありつつ自国文学と同様の中国文学ではなく、境界がはっきりした外国文学として登場したのではないか。

このように外国文学として移入された白話の講史(演義)小説の翻訳・翻案である通俗軍談は、当時の文学システムにおいてはどのような存在だったのだろうか。これについては、白話の講史(演義)小説というジャンルがこの時代に翻訳するテキストとして選択されたという点が一考に値するだろう。自国文学で講史(演義)小説と並置できるジャンルは軍記物語と考えられる

が、「4.1」で述べたように江戸初期には軍記物も人気のジャンルだったため、このジャンルの出版がある程度の読者を獲得できることは想定できただろう。しかし、上述の通り、戦国の世が終わった江戸時代の軍記物は中世のそれのような大きな合戦や歴史的転換点を描く歴史物語的な文芸作品ではなく、武家の家伝的な内容へと変化している。『信長記』や『太閤記』が「太平記読み」の台本になったような文芸的・娯楽的な性質を兼ね備えていたのは、この当時の軍記物としてはむしろ例外的だっただろう。つまり、この 2 作品の後は軍記物という文芸は空白のジャンルだったということだ。先述した元禄文化の「表」「裏」二つの理想の価値観に関する考察も考慮すると、当時の散文文学として、浮世草子の如き世俗の「裏」の理想が顕著に描かれる文芸が中心だったとはいえ、それとは一線を画すような、武士の価値観である秩序と倫理という「表」の理想を真正面から表現するジャンルも求められていたのではないか。この空白のジャンルを埋めることができたのが、中国の講史(演義)小説だと考えられるのではないか。

空白のジャンルを外国文学が埋める、というのは、翻訳文学がそのジャンルの中心になることを意味する。多元システム理論に則れば、「翻訳文学が中心的な地位になる」というのは、翻訳文学が自国の文学を推進する上で不可欠で革新的な力となって文学史上で重要だと見なされるような場合を指し、その場合の翻訳は、自国の既存の文学モデルにしたがうのではなく、原文に近い形での翻訳になるという仮説がある。この仮説は通俗軍談に当てはまるのだろうか。

ここで、従来は原典に訓点を施して読んできた中国文学を、通俗軍談では仮名交じりの日本語に訳したという翻訳方針について考えてみたい。訓読しなかった理由として即座に思い至るのは、第一に白話が単純に訓読に適さないこと、第二に、商業出版だった以上、大衆の読者を意識したため、知識人たち中心に受容されてきた訓読の方法を採らなかったということである。しかしながら、前者については、2 節で述べたように、最初の通俗軍談だった『通俗三国志』の原典『三国志演義』は白話がそれほど多くないことが徳田によって指摘されていた。また、江戸期の白話小説翻訳に一般的だったのは漢文訓読体の訓訳であったと言われる(川島 op. cit.: 337n)。川島によれば、当時白話文は様々に工夫を凝らして訓読されたという。訓訳の実際として、通常のリターン点や送り仮名だけではなく、原文の右側に片仮名で中国語の音が振られる、左側に語句の和訳が付けられる、文章の口語訳が加えられる、といった工夫が少ないながらあった。漢文訓読の伝統が深く根付いていたことからすれば、訓読にそうした工夫を加える方が自然だったように思われる。それでも講史(演義)小説には訓訳が選択されなかったのは、知識人たちにとっても新しい文芸であった白話小説に、旧来の訓読という読み方とは違うスタイルを求めたとも考えられる。それが同時に、従来の知識人中心の漢文受容とは違う大衆の読者をも考慮する翻訳になったのではないか。

このように通俗軍談は、漢文を日本語として読むという既存の訓読スタイルとは違う形式で翻訳された。空白だった軍記物のジャンルを翻訳が埋め、その翻訳方法が既存の支配的なス

タイトルを取らなかったという点と、多元システム理論の仮説である「翻訳が中心的地位にある場合は原文に近い翻訳になる」という仮説とが一致するかどうか、次に具体的な翻訳・翻案の方法について考察する。

c) 通俗軍談における翻訳態度——翻訳から翻案への移行の意味

次に、通俗軍談の具体的な翻訳姿勢・方法についても多元システム理論から考えてみたい。通俗軍談のうち初期の4作品は、2節で示した徳田の分析によると原文にかなり忠実な翻訳であるという。白話部分も、内容に関わるような大きな誤訳はないと評されている。徳田の解説によると、翻訳時期が進むにつれて白話の多い作品が翻訳されていったようである。また、初期の通俗軍談に共通するのは、本文中の書簡・古典を出典とする格言的表現・漢詩が日本語訳されず原文に訓点を施して示されており、原文の形式を保持した翻訳がなされていることだった。

これは、読者に漢文訓読の素地を求めていたことを示している。翻訳を提供する知識人たちにとっては文言の漢籍を読むのは日本語を読むのと同様の認識だったことは既に述べた。本文中の書簡・古典を出典とする表現・漢詩が文言であれば、本文の白話部分とは異なり、彼らにとっては常識的に理解できたはずであり、それを大衆にも常識として求めたということである。一般大衆に向けたという意味も大きかったはずの日本語訳でありながら、加藤が指摘していた支配階級が自らの価値観に基づいて大衆にむけて執筆していたという17世紀前半の意識がまだ見られる例とも言える。また他方で、確立していた訓読という方法ではない新しい翻訳スタイルを求めて翻訳を行っていたとしても、訓読の形式が残されるということは、それだけ訓読という読み方が文学システムにおいて強固な文体として確立していたということでもあるだろう。

いずれにせよ、初期の通俗軍談は忠実かつ原文の形式を保持した翻訳だったが、その後、受容第1期の後半になると、翻訳から翻案と呼ぶべき形式に変化し、それも時期を経るにつれて翻案の程度が大きくなっていったと指摘されていることは2章で述べた通りである。初期の4作品との大きな違いは、翻訳というより翻案であると見なされるほどの大きな内容の改編に加えて、初期の作品では本文中の漢詩がその形式のままで原文が保持されていたのに対し、後半の作品では本文中、つまり散文の中にその意味を溶かし込んでいるという点だった。原文の内容や形式に忠実だったスタイルが大きな改編へと変化したことについて、徳田はこの変化を〈翻訳→翻案→読本の創作〉という系譜に位置づけたが、もう一つ、当時の散文文学の発展とも重なると考えられないだろうか。つまり、当時の仮名草子からはじまって世俗をよりリアルに描いて大衆の人気を獲得する浮世草子が生まれ、それが西鶴によって大きく発展し、その後白話小説の影響も受けながら読本へと推移していく江戸の散文文学の流れとも一致するよ

うに思われる。通俗軍談の翻訳が翻案に推移していく元禄後半～宝永年間は、浮世草子を確立した西鶴が死去した後も多様な作品が出版され、浮世草子というジャンルが発展を遂げている時期(岡本・雲英 op. cit.: 30)と重なる。読者が様々な浮世草子を楽しんでいる状況であれば、その流行に合わせて、通俗も原作通りの翻訳から、読者にとっての読みやすさやわかりやすさ、面白さを重視した改作にシフトしたと考えるのは妥当だろう。つまり、自国文学である浮世草子が構築した一種の文学規範に通俗軍談が従ったと言えるのである。そうであれば、この時期の文学システムにおいては、自国文学の浮世草子が強い影響力を行使していたことになる。

また一方で、浮世草子が描く世俗的理想と対になる儒教的理想を担う通俗軍談の重要性も、浮世草子との関係性から見ると次第に弱まっていたと考えられる。ちょうど通俗軍談が完全に翻案と言える形式に変わっていた白話小説受容第1期の末期と重なる正徳～享保年間の浮世草子は、典型的だった西鶴のような好色物一辺倒ではなく、江島其磧^{きせき}や西沢一風らによる気質物や時代物も人気を博したという。特に時代物とは、過去の時代に題材を求めた歌舞伎や浄瑠璃の作品のことで、それを翻案した浮世草子作品が多く生まれた(岡本・雲英 ibid.)。時代物は主君や親への忠孝の精神といった秩序と倫理を重んじる武士文化、いわば「表」の理想を描くことが多い。通俗軍談の出版が始まった頃は、散文文学の中では浮世草子が「裏」の享乐的欲求を、通俗軍談が「表」の秩序を、それぞれ中心的なテーマとして描いていたと考えられるが、次第に読者が求める「表」「裏」の理想の反映は浮世草子というジャンルの中だけでも達成されるようになっていった。つまり、「表」の理想を描く文学という点で通俗軍談というジャンルの優位性は保たれなくなったということになる。通俗軍談という翻訳文学が文学システムの中で中心的な地位ではなくなり、自国文学に優位性を譲ったとも考えられよう。

こうして考えると、通俗軍談が出版され始めた頃は原文に忠実な翻訳だったというのは、散文文学システムとしては浮世草子が中心的地位を占めていたとは言え、空白になっていたジャンルを翻訳文学が埋めるという重要な役割を担い、そこでは翻訳が原文に近くなる、という多元システム理論の仮説と同様の様相を呈していると考えられる。一方、通俗軍談における原作に忠実な翻訳からいわゆる翻案への変化はどう説明できるだろうか。その時期の浮世草子が変わらぬ人気と多様化によって成熟しており、散文文学システム内で中心的な地位を占め続けていた中で、翻訳が原文から離れて翻案に変化したというのは、大衆にとっての読みやすさや興味関心に即すという浮世草子のスタイルに近づいたと考えることができる。これは、多元システム理論の仮説では、文学システムにおいて翻訳文学が中心ではない場合、翻訳が既存の自国文学のスタイルに近づくと同時に原文から離れていくという翻訳の特徴と一致する。すなわち、多元システム理論の仮説は、通俗軍談の翻訳・翻案も十分説明する説だということができるのである。

5. おわりに

以上のように、白話小説受容初期の翻訳・翻案である通俗軍談を当時の文学システムに位置づけ、多元システム理論での説明が可能か考察を加えてきた。その結果、多元システム理論における文学システム内の翻訳の位置づけに関する仮説は、通俗軍談の翻訳・翻案のケースに当てはまることが明らかになった。翻訳と結びつけることのできた文学システム内の要素は印刷出版、漢文訓読、江戸初期の散文文学、元禄文化の価値観などに限られた。しかし、そうしたコンテキストと通俗軍談の翻訳・翻案を関連づけ、徳田(1987)の重要な研究成果を踏まえた上で、翻訳学のアプローチから、文学のコンテキストに軸足を置いた新たな説明を加えることが一定程度できたと考えている。

本稿では白話小説受容の第1期しか扱っていないため、引き続き、受容第2期以降の翻訳文学システムを明らかにすることが次の課題である。「1. はじめに」で言及したように、翻訳学の観点から近代以降の翻訳についての研究は多くなされているが、その歴史的背景となる近世以前の研究はまだ多くない。本研究や筆者が進める今後の研究をそうした翻訳の歴史的な理解につながる一助にしていけるよう、この研究と同様の立脚点から近世から近代までの翻訳状況を連続的に考察してつなげていくことが最終的な目的である。

※ 本研究は JSPS 科研費 19K21632(挑戦的研究(萌芽))の助成、および2019年度札幌大学総合研究所個人研究助成を受けています。

【著者紹介および連絡先】

佐藤美希(SATO Miki) 札幌大学教授。博士(国際広報メディア)。翻訳による外国文学受容および近世・近代の翻訳史が研究テーマ。最近の論文に「世界文学全集の西洋と非西洋」佐藤＝ロスベアグ・ナナ(編著)(2021)『翻訳と文学』みすず書房、117-150。連絡先：mikisato@sapporo-u.ac.jp

【註】

¹ Translation studies の訳語は「翻訳研究」「翻訳学」「トランスレーション・スタディーズ」の3種類が使われており、未だ訳語が定まっているとは言えず、いずれが適切かには議論の余地がある。しかし本稿では、学会名称や、近年日本で発表されているこの分野の書籍や論文に「翻訳学」という表記が増加していることを踏まえ、さしあたり「翻訳学」と表記することとする。

² 徳田のこの著作は、1987年に日本学士院賞を受賞している。受賞理由として「本研究が先人の域を大きく超えている所以は、一つは著者が日本文学者にして同時に中国語に習熟し、中国近世の白話小説を十分に読みこなす力を備えていることである。これによって、日中両国の近世小説の内容、文章、語彙等を精密に比較検討して、日本の近世小説が、中国の小説から大きな影響を受けたことを明らかにすると共に、それが又単なる受容でなく、両国の国情、国民性の相違か

ら、いかなる変改がなされているかについても詳説している。今一つは、日本近世小説の原作や粉本となった中国白話小説のテキストを、中国の北京図書館等に探り、あるいは日本の図書館・文庫などを博捜するなど、多大の辛苦を重ねて、わずかに残存する稀覯な資料を蒐集・利用したことである。こうして本書は、日中比較文学研究上に大きな業績を上げていると共に、近世の読本の由来、発展、そしてそれが近代文学に至る過程を追究し、以て読本の特質を明らかにしようとして居り、すこぶる有意義にして独創的な労作であると認められる」と評されている。(日本学士院「徳田武君の『日本近世小説と中国小説』に対する受賞審査要旨」)

³ 戯作とは、近世後半の通俗小説一般を言う。前期読本(都賀庭鐘や上田秋成らによる怪異小説が中心)から、黄表紙、洒落本、人情本、滑稽本、後期読本(滝沢馬琴など)などのジャンルがある。本稿で扱う中国白話小説受容初期の翻訳・翻案は、前期読本の成立につながっていく読本前史的な位置づけになる。

⁴ 日本語訳は筆者による。以下、英語文献の日本語訳は、特段の注記がない限り筆者による。

⁵ 日本語訳は、同書の邦訳である秋草ほか(訳)(2011)『世界文学とは何か?』p.432による。

⁶ 数名の名前を挙げさせてもらえば、沼野充義は頻繁に翻訳学に言及しており、既に「翻訳論的転回」が起こったと明言し(2017: 11)、文学研究における翻訳の重要性を常に主張している。また、ナボコフの研究や日本における世界文学論を牽引する秋草俊一郎、自らも少数言語のバスク語による現代文学の翻訳者として活躍しながら翻訳を研究する金子奈美、日本近現代文学の英訳における ST と TT の様々な変異をテキスト分析と訳者や出版社による受容の観点から研究した片岡真伊などは、積極的に翻訳学の枠組みを用いて比較文学の分野で研究成果を発信している。しかし、全体的に見れば、文学研究の中で翻訳学に依拠した研究はまだ少数派だと言わざるを得ない。

⁷ 徳田は演義小説について「歴史に取材し、それを是非善悪の価値判断に基いて虚構化したもの」と説明し、講史小説と「同一のもの」だと述べている。(p. 59 注)

⁸ 徳田によれば、通俗軍談とは「中国の各時代の治乱興亡を硬質の漢字片仮名交りの文体で描いた読み物」である。「通俗」という表現は「中国の読物を翻訳したことを示す」(p. 13)。通俗軍談の特徴として「大本の書型、漢字片仮名まじりの表記、中国の歴史という題材、近世前期の刊行、挿絵を持たない」ことを挙げ、読本の特徴(半紙本の書型、漢字平仮名交じりの表記、日本の歴史という題材、近世中期以降の刊行、挿絵を持つ)と対比している(p. 14)。

⁹ 翻訳と翻案の区別については、徳田をはじめ本論で引用する多くの先行研究において、その定義は明確にされておらず、一般的な意味(翻訳は原典の言語を目標言語にしたもの、翻案は原典の大まかな筋を踏襲しながら換骨奪胎したもの)で両方の用語が用いられている。筆者は、双方の区別は恣意的にならざるを得ないため定義自体の再検討が必要だと考えているが、この点は本稿での主眼ではないため、さしあたって本稿では引用以外でこの言葉を用いる場合は「翻訳あるいは翻案」「翻訳・翻案」という表記を用いる。

¹⁰ 民間に伝わる伝承、あるいは広く小説の意味。

¹¹ 彌吉(ibid.)は出版を寛永 16 年、加藤(ibid.)は寛永 17 年頃としている。

¹² 加藤(ibid.: 540)は、大衆の識字率が上昇するのは 18 世紀になってからだと述べている。

¹³ 日本文学史では一般的に、近世の軍記物を中世の歴史物語としての軍記物語には含めない。キーン(Donald Keene)の *World Within Walls: Japanese Literature of the Pre-Modern Era, 1600-1867* (1999)でも、江戸時代の軍記物は文学として全く採り上げられていない。

¹⁴ 『好色一代男』(天和 2=1682)、『諸艶大鑑』(貞享元=1684 年)、『好色五人女』(貞享 3=1686 年)、『好色一代女』(貞享 3=1686 年)など。

15 『イソポのハブラス』はラテン語版から口語体のローマ字表記で訳されたとされるが、実際にはラテン語から直接ローマ字訳されたのではなく、文語体で訳された「祖本」があったのではないかと考えられている(南條 2018: 243)

16 引用文の旧漢字および旧仮名遣いは現在のものに直している。

17 講義および出版時期については研究者によってその時期の説明が異なる(戸川・神田 1974: 731, 735、今中 1977: 983、平石 1984: 40, 96、黒住 2003: 549、Wakabayashi 2005: 143n)。

18 「題言十則」の書き下し文は、河出書房新社版『荻生徂徠全集第五巻』(1977)所収の『譯文荃蹄』を引用し、旧漢字および旧仮名遣いは現在のものに直している。

【引用文献】

富士昭雄(1972)「奇異雑談集の成立」『駒澤国文』9: 10-20.

平石直昭(1984)『荻生徂徠年譜考』平凡社

今中寛司(1977)「解題」『荻生徂徠全集第 5 巻』河出書房新社 981-1003.

石崎又造(1940/1967)『近世日本に於ける支那俗語文學史』清水弘文堂

磯部彰(1998)「『西遊記』と『通俗西遊記』」和漢比較文学会(編)『近世文学と漢文学』汲古書院 87-148.

加藤周一(1975/1999)『日本文学史序説 上』ちくま学芸文庫

川島優子(2010)「白話小説はどう読まれたか—江戸時代の音読、和訳、訓読をめぐって—」中村ほか(編)『続「訓読」論—東アジア漢文世界の形成—』勉誠出版 311-338.

川戸道明(編著)(2020)『幕末明治翻訳書事典 文学・伝記・外国語リーダー編 第 1 巻 江戸期～明治 19 年』国書刊行会

北代美和子・齊藤美野(2013)「誌上討論: 齊藤美野著『近代日本の翻訳文化と日本語 翻訳王・森田思軒の功績』をめぐって」『翻訳研究への招待』No. 9: 149-161.

黒住真(2003)『近世日本社会と儒教』ぺりかん社

前田愛(1973/2001)『近代読者の成立』岩波書店

水野的(2007)「近代日本の文学的多元システムと翻訳の位相 — 直訳の系譜」『翻訳研究への招待』No. 1: 3-43.

南條恵津子(2018)「キリシタン文献(天草版)翻訳に見るイエズス会の布教方針」『通訳翻訳研究への招待』No.19: 234-253.

日本学士院(1987)「徳田武君の『日本近世小説と中国小説』に対する受賞審査要旨」
<https://www.japan-acad.go.jp/pdf/youshi/078/tokuda.pdf> (2021年8月7日確認)

沼野充義(2017)「「アダプテーション論的転回」に向けて」小川ほか(編)『文学とアダプテーション——ヨーロッパの文化的変容』春風社 5-12.

荻生徂徠「譯文荃蹄」今中・奈良本(編)(1977)『荻生徂徠全集第 5 巻』河出書房新社

- 岡本勝・雲英末雄(編)(2006)『近世文学研究事典』おうふう
- 齊藤美野(2012)『近代日本の翻訳文化と日本語:翻訳王・森田思軒の功績』ミネルヴァ書房
- 佐藤美希(2018)「荻生徂徠『譯文荃蹄』「題言十則」:江戸期漢学における徂徠の翻訳観」
『通訳翻訳研究への招待』No.19: 254-262.
- 邵丹(2016)「日本におけるアメリカ文学の翻訳の位置付け:ポリシステム理論を通じた分析に基づいて」『れにくさ:現代文芸論研究室論集』巻 6: 342-351.
- 戸川芳郎・神田信夫(1974)「解題・凡例」『荻生徂徠全集 2 言語篇』みすず書房 727-798.
- 徳田武(1987)『日本近世小説と中国小説』青裳堂書店
- 徳田武(編・解説)(1983a)『対訳中国歴史小説選集「新鐫陳眉公先生批評春秋列国志伝」第三巻』ゆまに書房
- (1983b)『対訳中国歴史小説選集「新刻剣嘯閣批評西漢演義伝」第二巻』ゆまに書房
- (1983c)『対訳中国歴史小説選集「新刊出像補訂参采史艦 南宋志伝通俗演義題評」』ゆまに書房
- (1984a)『対訳中国歴史小説選集「李卓吾先生批評三国志」第六巻』ゆまに書房
- (1984b)『対訳中国歴史小説選集「新刻按艦演義全像唐国志傳」第二巻』ゆまに書房
- 内田啓一(2007)『江戸の出版事情』青幻社
- 柳田泉(1950/2009)「明治初めの文学 戯作文学のはなし」『柳田泉の文学遺産 第一巻』右文書院 128-156.
- (1951/2009)「明治初期の文学思潮——戯作の諸流派と啓蒙文学」『柳田泉の文学遺産 第一巻』右文書院 106-127.
- 彌吉光長(1989)『未刊史料による日本出版文化 第四巻 江戸出版史—文芸社会学的結論』ゆまに書房
- Chang, N. (2010). Polysystem theory and translation. In Y. Gambier and L. van Doorslaer (Eds.), *Handbook of translation studies* (Vol. 1, pp. 257-263). Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Clements, R. (2015). *A cultural history of translation in Early Modern Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Damrosch, D. (2003). *What is world literature?* Princeton: Princeton University Press. [邦訳:デイヴィッド・ダムロッシュ/秋草ほか(訳)(2011)『世界文学とは何か?』国書刊行会]
- Even-Zohar, I. (2000). The position of translated literature within the literary polysystem. In L. Venuti (Ed.), *The translation studies reader* (pp. 192-197). London & New York: Routledge. (Original work published 1978)

——(1990). Polysystem Theory. In *Poetics Today*, 11(1), 9–26.

<https://doi.org/10.2307/1772666>

Keene, D. (1999). *World within walls: Japanese literature of the pre-modern era, 1600–1867*.

New York: Columbia University Press.

Totman, C. (1993). *Early Modern Japan*. Berkeley, Los Angeles & London: University of California Press.

Ueda, A. (2007). *Concealment of politics, politics of concealment: The production of “literature” in Meiji Japan*. Stanford: Stanford University Press.

Venuti, L. (1998). *The scandals of translation: Towards an ethics of difference*. London & New York: Routledge.

Wakabayashi, J. (2005). The reconceptualization of translation from Chinese in 18th-century Japan. In E. Hung (Ed.), *Translation and cultural change* (pp. 119–146). Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.

